

師走に咲く向日葵

妖怪の山を越えて更に進むと太陽の畑が在るのは知ってるよな？ そう、あの向日葵が咲き乱れる草原だ。もちろん今は十二月だ。向日葵なんて咲いている筈もなく、薄っすらと雪化粧に覆われて、一面真っ白のただの原っぱだ。と、思うだろ？ 私もそう思ってた。

ところが三日位前かな？ 太陽の畑の上を飛んでたら生えてたんだよ。その白い草原に一本だけ、黄色い向日葵が。

「それ、どうせ風見幽香の仕業でしょう？」

話してらうちにだんだんと熱のこもってきた魔理沙の語りに水を差して軽く一瞥をくれると、私はお茶請けのスコーンを口へ運ぶ。砂糖を控え目にして作ったスコーンは甘すぎず我ながら上品な味で、紅茶と実に相性が良かった。

「なんだよー！ ここから魔理沙さんの考察をだなー！」

「はいはい。ほら、蜂蜜をつけても美味しいわよ」

話を遮られてムツとした魔理沙の口に蜂蜜を塗ったスコ

ーンを入れてやった。最初は不服そうにモゴモゴと何か言っていたが、「あ、美味しい」と呟くと魔理沙の口は言葉も吐き出すことよりも一先ずスコーンを食べることに専念しだしたようだ。

「それにしても、向日葵ねえ……」

季節は冬、それも師走の真っ只中だ。

窓の外に目を向ければ雪が降りしきり、生物は皆ひっそりとその活動を潜めている。神社では巫女がいつもの格好で寒い寒いと言い、熊とスキマは冬眠している。

そんな季節に夏の花の代表格である向日葵ときたまんだから、そのあまりのギャップに私は首を傾げるしかなかった。

でも、考えてみれば白い雪原をキャンパスに一本だけ咲いている向日葵はさぞ絵になるんだろうな。と、私は想像しながら紅茶を口に含む。

テーブルの向こうを見れば、魔理沙はさらに二つほどスコーンを食べ終え紅茶を飲んでるところだった。飲みながらティーカップごしにこちらを上目遣いでチラチラと伺っているところを見ると、よほどその件の向日葵のことを話したいらしい。

そんな小動物みたいな表情と仕草をするな。なんだか私がおぼろげに酷い仕打ちをしたように思えてくるじゃない。

仕方ない。

一本だけ咲いているという向日葵を想像して僅かながら興味を惹かれたうえ、お手製スコーンを美味しいと言われて気を良くした私は助け舟を出してやることにした。

別に魔理沙の仕草のせいでは断じてない。

「で、そのご自慢の魔理沙さんの考察は？」

「え？ ふっふっふん、聞きたいか。そうだろそうだろ」

さっきの様子はどこへ行ったのか、得意げな顔で鷹揚に頷くと偉そうに踏ん反り返った。

この切り替えの早さ、少し見習いたいものである。

「よろしい、さっき話の腰を折ったことについてはこの美味いスコーンと紅茶のお代わりで大目に見てやろう」

そう言うて空になったカップを差し出してきたので注いでやっている、得意げな顔で魔理沙は口を開いた。

「多分風見幽香の仕業だと思う」

「……」

私は注いでいたカップをテーブルに置くと、無言で指を鳴らした。その合図をスイッチとして戸棚や家具の上など部屋の各所に居た人形達が各々武器を手に持ち一斉に魔理沙を包囲する。

以前研究が行き詰った時、暇つぶしにと人形に組み込んでみた対泥棒用撃退プログラムだったが、まさか初の対象

が魔理沙とは……あ、魔理沙は泥棒だからいいのか。

「オーケー。まずは落ち着いて話し合おう。最後まで話を聞いてからでも遅くは無いぞ、マドモアゼル」

「あらフロイライン。最後まで話を聞いたら私は満足するのかしら？」

「ああ、きつと腰を抜かす。抜けすぎて永琳の世話になること間違い無しだぜ」

「聞きましよう」

人形を退かせると、私は注ぎ終わっていた紅茶を魔理沙に渡して続きを聞くことにした。

「続きなんだけど、まあ、花が咲いているって事と、場所も場所なだけに風見幽香が一枚噛んでると見て間違いないと思うんだ。そしてあの滅多に動かない風見幽香が何かしている。これはもう異変なんじゃないか。と、魔理沙さんは考えたわけだ」

「異変？」

「考えてみるよ。こんな季節になっても咲いている向日葵これは立派な異変だぜ」

「異変……異変ねえ」

確かに、季節に関係する異変は今までもあった。

春の香りが強くなる頃になっても雪の降り続けた、西行寺幽々子が起した春雪異変。私も気になってふらふらと外

出して……：そういえばあの時久々に霊夢や魔理沙に会ったのよね。他には季節に関係なく様々な花々が咲き乱れた事もあった。その時は丁度研究で引き籠もってたから私は関わっていないけど、後で聞いた話では、あれは異変というよりは恒例行事みたいなものらしい。

しかし、それらと比べるとどうだろう。

冬になっても向日葵が一本だけ咲いているというのは異変というにはいささか小規模すぎないだろうか。今まで起こった異変には誰かの、何かしらの目的があった。地霊の湧き出た異変のように『それ』が目的では無いものもあるが、それでも季節外れの花がたった一輪咲いていたからといって異変だと決定付けるには弱すぎる。そもそも冬に向日葵が咲いていたからといって一体誰が得をするというのか。正に誰得である。

そうすると、魔理沙が異変だと決定付ける何かを見た、もしくは感じたということだろうか。段々と興味の湧いてきた私はさらに突っ込んで聞くことにした。

「それで、魔理沙さんの考察とやらは？」

「だから異変なんじゃないかなって」

「え……それだけ？」

「それだけ」

「え？」

「え？」

何を言っているんだこいつは。散々もったいぶっておいで、考察でもなんでもないじゃない。

「考察でもなんでもないじゃない！」

あまりの拍子抜けに、思わず考えていたことそのままに突っ込んでしまった。突然叫んだ私に、魔理沙は服の色よろしく目を白黒させている。

「いや、そんなこと言われても。私だって空から見ただけだったしなあ」

「季節外れの花が咲いていたから異変だなんて、里の子供だってもう少しマシな発想するわよ！」

「霊夢に続いてアリスにまで否定されるなんて……」

「決定的じゃない！あの勘のいい霊夢が否定したんなら、ほぼ間違いなく異変じゃないじゃない！」

「あんまり怒ると皺が増えるぜ」

知るか。私のワクワクを返せ。

「期待した私が馬鹿だったわ」

手元の紅茶を飲んで一息つく。少し冷えて苦味の増した紅茶は気分を落ち着けるのに大層役に立ってくれた。

要はいつもの与太話なのだ。それに対して勝手に期待に胸を膨らませたのは私なわけで、一人空回りしてただけで……：あーもう、なんだこの何とも言えない敗北感のよう

なもの。

「とりあえず腰を抜かしたるか？」

「ええ、そうね。いろんな意味でね」

たったこれだけの話を、あれだけでもつたいぶつて話す魔

理沙にはびっくりだ。心の底からそう思う。

「永琳の世話になりそうか？」

「そうね。胃痛で通院しようかしら」

「そうか、期待に添えたようで何よりだぜ」

あ、なんか冗談だったはずなのに、本当に胃が悲鳴をあ

げてきたような気がする。そうだ、もう一杯紅茶を飲もう。

そう思つてティーポットを持ち上げると中身はすでに空。

「紅茶淹れなおして来るわね」

「おう。ついでにお菓子もー」

「食べ過ぎると太るわよ」

などと言い合いながら台所へ向かうと、

「あー、あの向日葵は何なんだろうなー」

そんな魔理沙の呟きが妙に耳に残つたのだった。

「ホントにあつた……」

目の前には一輪の向日葵。魔理沙が語つていたまま、真

つ白な雪原に、そこだけは夏であるかのように黄色い花弁

つけた向日葵が咲いていた。

でもその姿は思い描いていたものとは大分違う。私は真

つ白なキャンバスに一輪だけ描かれたような、より己の存

在をアピールし、活き活きと咲き誇る夏の花を想像してい

たのだが、こうして目の前になると、冬の風雪に揺れる

その姿は弱々しく、まるで取り残された迷子か何かのよ

うな雰囲気醸し出していた。

見た感じは何の変哲も無い向日葵だ。しかし、観察をし

ていると違和感に気づく。この一見何の変哲も無い向日葵

からは妖気のようなものを感じるのだ。風見幽香が関わつ

ていると魔理沙は言っていたが、なるほど、それなら妖気

が感じられても不思議ではないのかもしれない。

「見てるだけじゃ分からないわね……調べてみましょう」

そう上海人形に話しかけ（といつても独り言のようなも

のだが）一歩を踏み出すと背後から声をかけられた。

「その花、抜くと死んじゃうわよ」

若い女性の声。こんな季節のこんな所にいる女性が普通

の人は訳は無く、誰であろうかは容易に予測できた。

「ああ、失念していたわ。花なんですから抜いたら然るべ

き処置をしないと死んじやうでしようね」

振り返らずに私はその声に応える。

「いえいえ、そうでは無いの。それを抜いたら死んでしまうのはお嬢さん、貴方です」

「驚いた。どう見ても向日葵だと思っていたのに、これはマンドラゴラだったのかしら？」

「それは真正正銘の向日葵よ。その花を抜いたら貴方が死ぬのは、私が殺すからに違いありませんわ」

言っていることは物騒なのに、ちっとも殺気が感じられない。こんな寒い中、こんな場所で、こんなやり取りをしていることが何だか可笑しくて、ククツと思わず笑みが出てしまう。

「まあ恐ろしい。ならこの綺麗で場違いな花を抜いて調べるのは止めるとしましょう」

そう言っ私は振り返った。

案の定、そこに立っていたのは目に優しくない色合いをしたチェック柄の服を着た、日傘を差して佇む緑髪の女性。四季のフラワーマスタ、風見幽香。

「それが賢明よ、人形遣い」

そう言うてにつこりと微笑むその姿は、幻想郷の様々な人妖から恐れられている大妖怪には全く見えない。しかしその纏っている存在感はやはり圧倒的で、畏怖の念を抱か

れるのも領ける。

「お久しぶりね、風見幽香」

「そうね、先日の宴会以来かしら？」

この広くて狭い幻想郷。初対面などという事も無く、お互い面識はあった。といつても顔見知り程度の間柄で、二人きりで話すのはこれが初めてではないだろうか。宴会でも私は別段誰かと絡むということも無く、せいぜい宴会の手伝いをしたり、潰れた魔理沙の世話をしたりしている程度だし、幽香も誰かに話しかけられて応える事はあつても、進んで自ら誰かに絡んでいくところは見たことが無かった。そもそも幽香はあまり宴会に顔を出すことも多い方ではないので、私たちが話す機会は自然少なくなるのも当然といえは当然だった。

「それで、人形遣いがこんな所に来るなんて珍しいわね。

てつきりこの季節に飛び回る魔法使いはあの白黒くらいだと思つてたけれど……」

「そうね、実はその白黒から面白いものがあるつて聞いて、興味が湧いたから見に来たのよ」

そう言っ私は向日葵をちらりと見た。この太陽の焔はすり鉢状になっているせいか、時折小高くなっている方向から冬の冷たい風が下方へと向かつて吹き抜けて行く。その風に揺られる向日葵は、やはり夏に見るものとは違いあ

まりにも弱々しく見える。

「これは、貴方が？」

「そうであるとも言えるし、そうでないとも言えるわね」

二人で向日葵を眺めながら、私はこの際だと、気になっていることを聞いてみることにした。

「魔理沙は異変じやないかって言っていたけど……」

「異変？ そうねえ、異変といえば異変かもしれないけれど、幻想郷ではよくある事よ」

そんな馬鹿な。こんな季節に咲いている向日葵なんて私は今まで見たことが無かった。しかし、幽香が言うには珍しい事ではないらしい。

「でも、この向日葵は大事なんでしょう？」

抜いたら殺すとかまで言われたのだ。きっと幽香にとって重要なものなのだろう。

「別にそういうわけじゃないわよ」

「え？ そうなの？」

「ええ、別にこの子に何かするわけでもないし、この子を使つて何かするわけでもないわ。ただ眺めてるだけだし」

その程度のもを抜いて殺されたら堪ったものではない。良かった、抜かなくて……。

しかし、どうにも幽香が言うことは要領を得ない。なんだか謎かけをされたみたいで、私は思わずむむっと唸って

考え込んでしまった。

別に珍しくもないし、幽香にとって特別な何かではない。

抜いたら怒るけど、別に幽香はこの向日葵になんら関与する気もない。考えれば考えるほど深みに嵌まっていつているような気がして、どうやら私は難しい顔をしていたようだった。幽香はそんな私を見て小さく笑うと、

「この子ね、妖化するみたいなの」

と、教えてくれた。

「夏になる前に、ここら一带に向日葵を植えたのだけど、この子だけ残ってしまったの。最初は不思議に思っていたんだけど、しばらく様子を見ていたら妖気を帯びてきたし、どうやらそういうことらしいのよね。それで、自然と妖化しようとしているのなら、最後まで見ていようかなって。

ほんの気まぐれよ」

柔らかく笑うその横顔は、数多の人妖から恐れられている妖怪と同一人物(妖物?)とは思えないくらい暖かいものだった。

「ほら、よく見てみて」

そう向日葵を指されたので幻視を使つて見ると、その向日葵の根元、そこだけ雪が無く地面が露出しているところにとても小さな人影が見えた。

「これって……妖精？」

そこにいたのは小さなヒトガタだった。普通の妖精よりは一回り大きい程度の少女が、手にミニチュアみたいな向日葵を抱いて静かに眠っている。しかし、見た目は妖精なのに感じる妖気はいっぱしのものだ。

まだ存在が不安定で幻視しないと見れないのだと、幽香が教えてくれた。

「妖精が妖怪になるの？」

そんな事象は見たことが無い。文献を探せば前例はあるのかもしれないが、少なくとも私は知らない。しかし幻想郷ではよくある事と言っていたのだからあるのだろう。そんなことを考えていると、

「さあ？　そもそもこの子は本当に妖精なのかしらね？　他に見た妖怪誕生の瞬間はそれぞれがてんでバラバラだったから参考にならないし……」

どうやら幽香にもよく分かっているらしい。

「寄り代のようなものなんじゃないかしら？　どっちがどちのつて事は分らないけれど」

些細な事でしょう。と、幽香は続けて言った。

「向日葵が妖気を発するようになったと知って、気になつて見に来たらこの子がここで眠っていたの。探れば分かると思うけど、どちらからも同じ妖気を感じるの。きっと向日葵はこの子であり、この子もまた向日葵なんじゃないか

しら。初めて見たのは秋頃だったかしらね。」

「じゃあ、その頃からずっと世話を？」

「まさか、世話なんてしてないわよ」

私の問いに幽香は笑って否定した。

「自然に妖化しようとしているんだもの、私が手を加える道理は無いわ」

「じゃあ、ただ見ているだけ？」

「そう、それでいいのよ」

魔法使いとは根本的に違う、他の妖怪の考え方は私にはよく分からなかったが、言われてみれば「そういうものかな」と納得してしまった。

そもそも興味を惹かれて見に来ただけで、それ以上の目的があった訳でもない私は、納得してしまつた以上長居は無用と立ち去ることにした。

「あら、もう帰るの？」

「ええ、この向日葵がどんなものかも分かつたし、私の興味は満たされたもの」

それに、その向日葵の根元ですやすやと寝ている妖精(のようなもの)と、それを見守っている幽香の邪魔をしたくない気持ちもあった。

「また来てもいいかしら？」

「ええ、構わないわよ」

そう微笑んだ幽香の顔は温かくて、これがあの泣く子も黙って震えて逃げ出す大妖怪とは、どうにも信じられなかった。

3

「アリスずるい」

開口一番がこれである。目の前にはティーセットとクッキーとふくれっ面の魔理沙。口を尖らせて、対面に座る私を恨みがましく睨んでいる。

既にあれから三日ほど経ってしまったが、太陽の畑であったことを魔理沙に話したらこれだ。あんたはどこのお子様かと問いたい。あまりの子供っぽい抗議に返すのも面倒で、私は紅茶に専念することにした。

「私が見つけたのに黙って見に行くなんてずるい」

はいはい分かりました。分かったから頼っぺたまで膨らますんじゃない。何歳児だ。

「魔理沙さんは気分を害したぞ！ よって今日のお茶会は早々にお開きにする！」

いや、私がティータイムにしようとしたらあんたがいつ

ものようにふらりとやって来たんじゃない。

「というわけで、行こうぜアリス」

「え？ どこに？」

恨み節を延々呟いていた魔理沙が急に話を降ってくるものだから思わず聞き返してしまった。

「太陽の畑！ 私も見たいぜ！」

目をキラキラさせて今にも飛び出さんとする魔理沙。まあ、そうくるでしようね。

「分かったから、向日葵は逃げないから、お茶終わってからもいいでしょう？」

「もう堪能した」

「早っ！」

見ればクッキーと魔理沙の紅茶は既に無くなっていた。

結局急かされるまま慌しいティータイムを終えて私達は太陽の畑へと向かったのだった。

三日前と変わらぬ真っ白な平原。その中にやはり季節外れの花が咲いていた。相変わらず風にさらされるままの向日葵は弱々しく、夏の花だというのに儂さを感じてしまうのは、やはり冬という眠りの季節のなせる業だろうか。

辺りを見渡しても幽香の姿は無いところを見るとどこか

に出かけているのか見当たらない。四六時中付つきりって訳でないということだろうか。

「これがその妖怪向日葵かー」

小柄な魔理沙は向日葵を見上げるカタチで眺めていた。

今日は風も強いせいかな、風に遊ばれている向日葵は今にも吹かれて飛んでいきそうだった。

「……あら？」

魔理沙に続いて向日葵に近づいた時、なにやら違和感を感じて立ち止まった。

先日と何か違う。単に雰囲気として弱々しく感じるのではなく、あからさまに弱っている。向日葵から感じられる妖気が先日と比べると非常に弱くなっているのだった。

「これは……」

根元を幻視してみると、妖精(みたいなもの)は変わらずにスヤスヤと眠りこけている。しかし、幽香が以前この子と向日葵は同一だと語っていたように、感じる妖気は向日葵同様非常に小さくなっていった。

「どれ位で妖怪になるんだろうなー」

先日の向日葵を知らない魔理沙は、当然ながら異常に気づかず向日葵を眺めている。

「あら、貴方たち」

声のする方に振り返れば、そこには幽香がいた。

「こんな寒い中どうしたの？」

「おお、幽香か。噂の妖怪向日葵を見に来たんだ」

「そう……」

一瞬、幽香の表情が曇った気がした。気のせいかもしれないが、そうでなくても理由はなんとなく察しがつく。

「幽香」

私は向日葵に夢中な魔理沙をおいて、幽香に耳打ちした。

「あの向日葵……」

「ええ、大分弱ってるわね」

存在として半端な状態では花の健康状態も酷く関わってきてしまう。夏の花がこの寒さに耐えられるはずは無いのだ。四月に降る雪がすぐに溶けてしまうように、十二月に咲く向日葵が五体満足でいられる道理は無い。

「暖を取ってあげたりしたほうがいいのかしら？」

「向日葵にとってはそうでしょうね」

やはり幽香は我関せずを決め込むつもりようだ。秋口から見てるといいうなら、もう二カ月以上は経っている筈だ。その上花の妖怪といえれば自分の同属のようなものだろう。それなのに幽香の対応はいまいち腑に落ちなかった。

「なあ幽香。あれって幽香が植えたんだよな」

気づけば魔理沙が私達のところに戻ってきて、先日私が聞いた事と同じようなことを聞き始めた。一通り聞き終え

た魔理沙は満足したように、

「そうか、つまり幽香はママになったわけか」

「マ……マ？」

うんうんと頷く魔理沙を横に、幽香は複雑な表情を浮かべている。まあ、知らないうちにママとか呼ばれる羽目になるのは誰だって困るだろう。

「なあ幽香ママ、向日葵寒そうだから暖めてやろうぜ。いいよな？」

「マ……好きにしないさい。あとママって呼ぶのやめて」

若干ぐったりして答える幽香に適当に返事をする魔理沙は向日葵の傍でミニ八卦炉を起動させた。

「いいの？」

未だにぐったりしてる事には目を瞑り、私は幽香に問いかけた。あの魔理沙の介入は幽香にとって不本意なのではないのだろうか。そう不安に思ったのである。

「いいのよ」

あら意外。私はてっきり――。

「てっきり許さないと思った？」

「ええ、だって二カ月も見てきた貴方が何もしないんですもの。他人の介入は嫌がると思ったわ」

「例えば、人が滅多に寄らない場所に咲いた花に、気まぐれで水をあげる人がいるかもしれない。でも花はその気ま

ぐれに依存して生きていく訳ではないでしょう？ なら、

それくらいは良いんじゃないかしら」

「そういうもののなの？」

「そういうものよ」

どうやら付きつきりで見ている幽香が世話をすることは依存につながるのでダメだが、通りすがりの魔理沙が世話をするのは良いらしい。

「自然はととてもとても残酷だから――」

そう呟く幽香の表情には、先程と同じ曇りが見て取れた。

「幽香ママは厳しいわね」

「ちよっと、貴方までママって言わないでよ……」

今度は別の意味で表情が曇った。あまりからかうと今後が怖いのでこのくらいにしておこう。

「なあ、こいつはいつ妖化するんだ？」

小一時間ほど向日葵を暖める作業に没頭していた魔理沙がその作業を終えて幽香に問いかけた。

幽香は少しの逡巡の後、「明後日かしら」と答えた。

「明後日か。見に来てもいいか？」

「ええ、いいわよ。というか、私に許可をとる必要はないと思うんだけど」

「いやあ、幽香ママにダメだつて言われたら流石の私も遠慮しようかなって」

「……やつぱりダメ」

そんなやり取りを眺めながら、私は先程の幽香の逡巡が気になっていた。

「それにしても魔理沙。貴方妖怪退治するのに妖化は放つておいていいの？」

「私が退治するのは悪さをする妖怪だけだぜ。判断基準は私の主観だけだな」

あれはやつぱり、そういうことなんだろうか。

「じゃあ、明後日また来るぜ」

「はいはい、人間は弱いんだから、精々その日までに死なないようにね」

ううん、考えても仕方ない。

私達は幽香に別れを告げてそれぞれ帰路へとついた。

4

が覚めた。

「ああもう、そんな大声出さなくても聞こえてるわよ。というか窓から寝室に直接乗り込んでくるのマジでやめて」

寝起きでぼやける頭を抑えながら、窓から直接私を覗き込んでいる魔理沙を睨みつける。

「さあ、早く行こうぜ」

時計を見れば十時半。予想以上に寝てしまっていたようだ。いや、七時頃に一度起きた記憶はある。だが今日は起きる気になれなかったのだ。理由はなんとなく分かっている。幽香のところへ行きたくないのだ。向日葵を見た魔理沙を見たくないのだ。

そんなことを魔理沙に直接言えるはずもなく、身支度を整えた私は魔理沙に先導されるまま太陽の畑へと向かうことになった。

真っ白な雪原が太陽の光を反射して、太陽の畑は冬になつてもその名に違わぬ姿を表している。

その雪原の真っ只中に日傘の女性の姿が見て取れた。風見幽香は先日と変わらぬ場所でも今日も佇んでいる。

「よう幽香、約束どおりやってきたぜ」

「アリスー！ アリスー！」
あれから二日後の朝。至近距離から響く魔理沙の声で目

て行った。

「約束した覚えはないんだけど」

そう苦笑して幽香は振り返る。

その顔はどこか憂いをひめて、それでも滲み出るのは優しき。幽香はとても温かい表情をしていた。

「で、向日葵はどうなった？」

「もう終わりよ」

「なんだよータッチ差か。妖怪が生まれる瞬間つてのを見たかった……のに……」

幽香が身をずらして私達にも向日葵が見えるようにすると、そこには枯れて萎んだ向日葵が在った。

「もう……終わるの」

儂げながらも黄色い花弁をたたえて空を向いていた花は萎れ、もう欠片ほどの妖気の残留しか感じることは出来なかった。

「そんな、なんで……」

魔理沙が呟く。

私はなんとなく分かっていた結末だ。だから来たくなかった。そして薄々感づいていたのに魔理沙に言わなかった私に口を挟む権利なんかありはしない。

「今日妖化するかも知れないと言ったけど、今日死なないとは言っていないわ」

あくまでも淡々といった口調で幽香が魔理沙に答える。

「やっぱり、妖化しかけていたとはいえ、向日葵にこの季節は辛かったのね。日に日に弱っていつて……でも、それも今日で終わり」

「まだ死んでないだろ！ 妖気を感じるじゃないか！ そうだ、図書館に行けば何か分かるかも——」

「止しなさいな」

大急ぎで飛び立とうとする魔理沙を幽香が振り向きもせず制止する。

「なんでだよ、助かるかもしれないだろ！ 助けられるかもしれないだろ！」

「そうね」

「そうねって、お前……」

冷酷な幽香にキッと睨みつける魔理沙だが、幽香が改めて魔理沙に向き直ったことで、自然魔理沙は幽香の話しを聞く流れになってしまった。

「ダメよ。ここで手を貸して方に一つ生き長らえたとしても、この子は一人で生きていけなくなる。冬も越せない妖怪がこの先幻想郷でやっていける筈もないわ」

「それは……」

「魔理沙、私達妖怪という存在はね、知つてのとおり何よりも精神に依存するの。そんな私達妖怪が誰かの、それも

人間の手助けを受けないと生きていけないなんてことになったら、それこそ生きていけないわ」

妖怪退治をしている魔理沙なら分かっているであろうことを優しく、説き伏せるように語る。魔理沙も頭では分かっているのだ。でも感情がそれを由としない。

「でも、このまま見殺しにするなんて……」

「見殺しじゃないわ」

魔理沙に語りかけるその笑顔は慈愛に満ちていて、とても人間友好度最悪の、危険度極高と評される大妖怪とは思えない優しい表情だった。

「この子は土に返り、眠りの季節を経てまた次の季節に咲く。そうやって花は廻りまわるのよ。だからこの子にまたねって、言ってあげてね」

既に枯れた向日葵の根元を幻視すると、あの小さな妖精が弱々しくも微笑んでいた。その顔には死に対する怯えなどは一切無い。いや、死ではなく眠るだけなのだ。

そう、目覚めの季節を経て、また咲くべき季節になるまでの短くも永い眠りへと……

エピローグ

数日後、私は気まぐれで太陽の畑へと赴いた。

特に理由は無い。気まぐれだ。

向日葵の咲いていた跡を何となく見たくなくなった。ただそれだけで赴いた。

向日葵のいなくなった太陽の畑は一面真っ白で、これが正常なはずなのにどこか物足りない気がしてしまう。

だがそんな中、向日葵の咲いていた、まだ雪の積もりきっていない地面に花を見つけた。

咲いているわけではなく、誰かが置いていったのだろう。

誰かなんて分かりきっている。

師走にミヤコワスレなんか咲くものか。

「ミヤコワスレの花言葉は……」

あとがき

どうも、三好加奈太です。

今回は諸事情により幽香本での小説と相成りました。

幽香本なんだよ！ アリスの定番多いけど、つてかアリスの一人称で進んでるけど幽香本なんだよ！

そんなどうでもいいことはさておき、2009年ももう終わりですね。皆さんはどんな1年でしたか？ 俺は激動の1年でした。具体的には正社員からフリーターにジョブチェンジしました。

どうでもいいですね。

それでは皆さんよいお年を。

どうでもいいついでに

エピオンのコンボって「前×5後↓特」で良いんだよね？

俺フルバ使いだから覚えなくてもいいけど。

とりあえず誰かガンガンNext plusやろうぜ。

